

隅田川

※対訳下たのしむ※

すみだがわ



目次

隅田川	三宅晶子	3
〈隅田川〉の舞台装束・作り物	河村晴久	30
能の豆知識・〈隅田川〉のふる里・お能を習いたい方に		32

舞台図（松野奏風筆）、及び下段の詞章は
観世流謡本によった。

隅田川

(すみだがわ)

三宅晶子

〈隅田川〉（すみだがわ）

ある年の三月十五日の夕暮れ時、武蔵の国隅田川の渡し場では、舟頭がこの日最後の舟を出そうと、客を集めている。そこへ旅人が到着し、女物狂おんなものぐるいがやってくるかと告げると、舟頭は彼女を待つことにする。人商人にさらわれたわが子の行方をさがして、都から遙々やって来た女に、舟頭は面白く狂って見せなければ舟に乗せないと言う。『伊勢物語』九段の「都鳥みやどり」に関するエピソードを引き合いに出しながら、巧みな受け答えで業平と自分の共通性を訴える女に一同は感動し、女は舟上の人となる。

舟頭は、舟中のつれづれにと、一年前の今日対岸下総しもとうさの川岸で亡くなった梅若丸のことを物語る。舟が到着しても降りようとせず泣いている女に舟頭がわけを尋ねると、その子こそ探しているわが子であると告げる。

舟頭は女を梅若丸の塚に案内し、これから供養のための大念仏を行うから共に弔うよう勧める。悲嘆にくれる女も気を取り直して鉦鼓しょうこを鳴らし、念仏を唱えると、塚の内から梅若丸の亡霊が姿を現す。触れようとすると消えてしまう幻に、いつそう増す悲しみの中、やがて東の空が白み始め、夜明けと共に亡霊の姿も消えてしまう。

《この能の魅力》

現存曲唯一の、出会えない物狂能であるということが、最大の特色である。物狂能は、「狂乱の芸能」を見せる能であり、親子、夫婦などの別れから出会いまでの物語を背景としている場合が多い。主人公は諸国を巡り歩いて、情報収集し、生活手段として狂乱の芸能を見せる。やがて神仏の加護により相手と出会い、ハッピーエンドとなる。《隅田川》も同種の曲だが、母親が得た情報はわが子の一年前の死であり、出逢ったのは亡霊のわが子であった。

《隅田川》は完璧な悲劇である。単に物狂能の結末を変えたのではなく、じつに緻密な計算と周到な準備を経て、悲劇が完成している。あまりにも美しく悲しい物語であるために、観客は易々とその悲劇の虜にされてしまうのである。

まず隅田川までの遠さが、数段階かけて繰り返し示されている。そして都に對しての鄙ひん。都至上主義は、利用されている『伊勢物語』がすでに明確に打ち出している姿勢であるが、東、そしてさらにその向こうの陸奥は、未開の地の強烈な印象を与えている。そんなところで一人死んでいった幼い子であり、そんなところまで一人で旅してきた都の女なのである。

その母の臉まはたの裡うちには、在りし日のわが子の姿が見えている。一方幻として姿を現したのは、死装束に真つ黒でぼうぼうとしたざんばら髪の、まさに成仏できずにさまよう亡霊である。この対比は衝撃的で、元雅が子方こかたを出さなくてはできないと世阿弥に断言した子方とは、亡霊姿のそれなのであり、確かにこの登場がなくては、悲劇の完成に画竜点睛を欠くであろう。

子供の命日は三月十五日、つまり大念仏はおぼろ月の満月に照らされた中で行われる。「春宵一刻値千金」(蘇軾、春夜詩)と詠われた春の宵が、明けてくれることだけが救いであると思わせるような、悲しい夜となってしまう。

【作者】観世元雅もとまさ。世阿弥の『五音』

に、「隅田川 元雅曲」としてシテ登場の段(4段)の「サシ」冒頭があげられる。『申楽談儀』には、子方をめぐつての世阿弥と元雅の会話が記されている。

【題材】特になし。都鳥をめぐつての渡し守との応対の場面(5段)には、『伊勢物語』九段が利用されている。

【場面】武蔵の国(東京都・埼玉県、一部神奈川県)と下総の国(千葉県北部と茨城県の一部)の国境を流れる隅田川(現在は東京都東部を流れる荒川の分流だが当時は荒川下流で利根川の主流が合流する大河だった)の武蔵の国の側の渡し場、舟上、対岸(柳の植えられた塚の前)。

【登場人物】

シテ 狂女、梅若丸の母(面、深井)

子方 梅若丸の亡霊

ワキ 隅田川の渡し守

ワキツレ 旅人(都の者、下掛りは

東国の商人)

渡し守の登場 後見こうけんによって、塚の作り物が運び出され、大小前に置かれる。中には子方こかたが入っている。舞台は隅田川、武蔵の国側の川岸である。作り物は対岸の塚なので、今は登場人物達の近くにあるわけではない。

笛の演奏の中、隅田川の渡し守（ワキ）が登場し渡航のことを告げ、地謡じうたい前に座る。

〔名ノリ笛〕 能の開始を告げる静かで叙情的な笛の演奏につれて、渡し守が登場する。

渡し守

私は武蔵の国隅田川の渡し守でございます。今日は出船時間を早めて、お客を渡そうと思いません。実はこの地でちよつとわけあって、大念仏を行いますので、お坊様もご在家の方も区別無く乗客を集めます。そのことを皆さんご承知ください。



〔名ノリ笛〕

〔名ノリ〕

ワキへこれは武蔵むさしの国隅田川ワタシケリの渡守ソオロオにて候、今日は舟を急ぎ人々を渡さばやと存サイショじ候、又この在所サイショにさる子シ細サイあつて、大念仏ダイネンブツを申す事の候間、僧俗ソウゾクを嫌きらはず人数ニンジウを集め候、その由皆々心得ソオラニ候へ